

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

遠富士の孤高の白さ冬深し 八尋 信子

富士の麓で仰ぐときの雪の富士は崇高である。しかし遠くから眺める富士はこの句のように孤高極まりない。雪の輝きは崇高を超えもはや神の領域に。近未来の噴火が予測されているが、今しばらくは孤高の白さでいて欲しいものである。

はやばやと上巳の飾り老いひとり 山下 道子

上巳は雛祭。独り暮したが、ささやかに雛を飾り祝う。「老いひとり」に句の重点が置かれていて胸が詰まる。一方「はやばやと」には、家族団欒華やかだった頃の慣習が反映されていて、これも切ない。雛祭は陽暦の三月に行われているが、今でも四月初めに行う地域は多い。例えば京都の旧公家・冷泉家では、雛は三月二十九日頃に飾り、四月三日には雛人形にご馳走の膳を上げる。

漕がず座すぶらんこの揺れ懐かしむ 山田 雅子

漕がないまでも、ぶらんこに腰掛けるだけでその揺れを楽しむことは出来る。空を飛ばなくても、自分でぶら

ぶらぶらんこを動かせば気分も一新する。息抜きには持つてこいの場所で、幼い頃に遊んでいた自分を、友だちを、思い出しては懐かしむことも出来る。ぶらんこは、タイムマシーンなのかもしれない。

わが胸にひかりの飛礫ゆりかもめ 東 祥子

百合鷗が波の上からさーつと舞い上がる瞬間の眩しい光。或いは頭上すれすれに飛ぶ百合鷗の羽搏く光。その光を「ひかりの飛礫」と把握し尚かつ「わが胸に」と畳み掛けるこの句の躍動感。隅田川での大きな収穫。

菜の花のおひたしですと夫に告げ 荒尾寿美江

菜の花の句というと、蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」や一茶の「菜の花のとつばづれなりふじの山」を思い出すが、荒尾さんの句ではこれを「おひたし」にして夫君に差し出している。素朴な味わいのある一品なのだろう。料理研究家の辰巳浜子夫人は菜の花の味を「ふくらみのある味」と表現していた。作者は菜の花のおひたしで、春の到来を夫の告げたのである。

神戻り給ふ足音冬の雷 伊澤やすゑ

神の旅が終り、全国へ神様が帰ってこられる。その頃にたまたま鳴った雷を作者は神の足音として聞いてい

る。冬の雷であるから、天地を裂く大きな音ではなく、みしつみしつと空を歩いている感じ。その冬の雷で目覚めた中村草田男の「冬の雷に醒めし眠を継がんとす」の句もある。掲出句は神の足音がしたという把握が秀抜。

人と逢ふときめきに似て雛飾る 石井 佐知

人と逢う時のときめきと、お雛様を飾る時のときめき。そのときめきが似ていると作者は言う。わくわくしながら手にする雛はもはや人工のものではなく、その目、その姿には命が宿っている。作者は人と逢う時のように華やいだ気分、少しい着物を着て雛と対しているのだろうか。「ときめき」を絶やさないうき方に共鳴した。

冬暖か石堀長き御殿坂 石垣喜代子

御殿坂は都内に幾つかあるが、この句の坂は日暮里駅北口を出て谷中方面に少し進んだところの御殿坂かもしれない。桜の季節には桜のトンネルが美しい坂。近くに本行寺や谷中墓地がある。高低差のある急坂をゆつくり歩く作者に冬の日差しが暖かい。「石堀長き」にゆつたりした時間が表現されている。

七草粥生きて宇宙の端にある 市村 啓子

七草粥を一人戴き、つくづく今生きてると作者は思

う。この句ではそれを「宇宙の端」で感じているという。宇宙の端に位置する地球という星。宇宙の中心でなく、その端っこに生きているという作者の心持ちが清新である。「銀河系」とある酒場のヒヤシンス 橋間石

在りし日の妻の初夢見たく眠る 岩根 甲

下五「見たく眠る」の字余りは、妻への思慕の深さを示す。妻の夢を見たたくて眠るなど凡人の業ではない。しかも初夢で逢いたいと言っている。これ以上の妻想いは無いのではないかと思われる。

寅年の波乱の予感大寒波 牛込はる子

牛込さんも私も寅年の生まれ。今年には波乱の予感がするという予感が残念ながら当たってしまった。新型コロナウイルスの第六波オミクロン株による新たな感染拡大と、ロシアのウクライナへの侵攻。寅年はまだこの先が長い。大寒波は収まっても、ご油断召さるな。

書初やこころ平に眼鏡拭く 内海 範子

書初にどうして「眼鏡拭く」が取り合わせられたのか不思議な句である。全く計らひは見えない。恐らく意識しないで取り合わせてしまったようだ。書く前に心を落ち着かせようと眼鏡を拭いたのだろうが、面白い。

小付負ふ帰路にほのかな寒茜 大下 壽櫻

小付は荷物の上にさらに添える小さな荷物。それらを負つて家路につく途中、澄み切つた冬の空に描かれ始めた茜色が作者の目に入った。まだ仄かな色合いだがやがては鮮やかな色に。荷が重いのかは知らねどもその寒茜に見惚れて立ち尽くす作者がこの句に居る。

百学び百八忘れ切山椒 太田 裕子

「百学び百忘れる」のだったら当り前でつまらない。百八だからこそ面白い。百八は人間の煩惱の数なので、その同じ数を忘れていくというのには合点がゆく。新年を迎えたためたさの中で、あつけらかと自身を老いを詠んだ一句だが、この境地はそう真似できるものではない。切山椒は下町つ子に親しまれてきた蒸し菓子。

切株に我は彫像日向ぼこ 小河原政子

切株に丁度日が当たっていたのだろう、その切株を見つけて座り日向ぼこしている小河原さん。目を細めて日差しをありがたく受け入れている。微動だにもしない我が身を何気なく見たら「あら私って彫像みたい」。いつもにこやかな作者なので、この彫像もきつと笑みを湛えているに違いない。写真を撮つて差し上げたいくらいの素晴らしい彫像。

昨日より少し遠くへ冬日和 北 好夫

寒さやウィルス感染の心配をして家に籠る日々がいまだに続く。近所へ買物などに出掛けること以外はそれ程遠くへ出ないようになっている作者だが、今日は何か暖かい。「少し遠くへ」行きたいと思ひ、実際に徒歩あるいは自家用車で少し遠い所へ行つたのだろう。「少し遠くへ」と冬日和との言葉の斡旋の良さに和んだ。「知らない海をながめていたい どこか遠くへ行きたい 永六輔」

山陰に神を祀りて採水池 栗原 季星

採水池は川や湖沼などの天然氷を切つて採取すること。この句では採水池。作者の住む秩父地方に在る池か。山かげにその採水池をお守りする神を祀り、氷を切り出すときにはその神に手を合わせる。古来の仕来りを今に伝える、その厳肅な場面が想像できる格調高い一句。

寒明けの日差し眠れる芽にそつと 小坏あゆみ

「寒明けの日差し」で一旦切れて「眠れる芽」に繋がる。まだ芽立ちしていない眠つたままのところへ、お日様が「寒が明けたぞ」と光を注ぐ。「芽にそつと」の表現に作者の優しい眼差しが感じられる。芽吹きは思つた以上に早いかもしれない。

歳末や八百屋の外にもレジの立つ 金子かほる

暮れの八百屋さんは年用意の買い物客でごつた返す。普段は一つか二つのレジで会計を行うが、買い物客が多く並ぶ歳末は、店の外にもレジを置く場所を設けて混雑を緩和するようだ。「歳末」に納得した一句。

小さき手とお手つきなしのかるたとり 金田 知子

お手つきとは、懐かしい言葉だ。歌留多は慣れないと早とちりし、誤つて違う札に手を触れてしまう。この句ではそういうお手つきは双方無く、スムーズに終つたようである。「小さき手」の子どもの相手をして、歌留多を読んだり札を取つたり、作者は楽しい時間を手に入れた。

初雪の結晶撮れるスマホかな 金田 喜子

昔はマクロレンズで接写したのだが、最近ではスマートフォンで「初雪の結晶」が撮れると作者はいう。撮つたのが普通の雪でなく「初雪」であつたというところに喜びが感じられる。綺麗な結晶が撮れたことでしょう。

極月や蛇口の水に弾かるる 菊地 孝枝

「水温む」とは真逆な師走の水道水の冷たさを詠む。手を蛇口に差し出すとその水が余りにも冷たいものだから、先ず手が驚く。「弾かるる」感触に実感がある。

裸木に問へば淋しくないと云ふ 小泉まり子

裸木との心の会話。枯葉をすべて落としたりした孤高の裸木に「さぞやお淋しいことでしょう」と問う。暫くして「淋しくない」の聲が返ってくる。何故淋しくないのかと、作者は考える。裸木の枝々の先に春へ向けての息吹きが感じられ、頷く作者。そういう場面が想像された。

庭の萐切つて百個の餃子焼く 小濱けえ子

冷凍の餃子でなく手作りの餃子。フライパンに一度でどのくらい焼けるのか知らないが、百個とは凄い。何かのパーティーで出すのか、家族だけで食べるのなら一人何個食べるのか、などと勝手に考えてしまう。「庭の萐切つて」の勢いが「餃子焼く」を盛り立て、元氣いっぱいな句になった。

春めくと朝の訓示の枕振り 小林ゆきお

学校の朝礼での校長先生とか教頭先生の訓示。厳肅な内容の訓示だから、その前に少し生徒の心を和ませようと身近な軽い話をする。その前置きの言葉を「枕を振る」とも言い、作者も「枕振り」と使っている。春めく季節ともなると、話はずい長くなって、横道にも逸れてしまい、立つて聞いている生徒の方が疲れてしまうことがあるらしい。訓示や乾杯の挨拶は短く。

好きな木に好きな刻きて庭の鴟 小林 玲

鴟が庭に来て、木に好き放題止まっているという句。「好きな木に好きな刻きて」は、日がな一日庭を見ていての感想がそのまま言葉となった。自由に庭へ出入りできるこの鴟に比して我々のこの心の閉塞感は何なのだろうなどと読者は勝手に理解したりするが、作者はもつと大らかな心で鴟を眺めていたことだろう。

「むかしは」と言ふが口癖木の葉髪 斉藤久美子

「今の若い者は」とか「今どきの言葉遣いは」などという言葉は古來どの時代にも言われてきた。「昔はなア」という言葉も然うであろう。口にするのは決まって初老以上。この句では「木の葉髪」でそれを表している。ところが最近小学生が「昔は」と言っているのを耳にする。どうなっているんだ、近頃の若いもんは。

針祭る明治生れの祖母の針 佐藤 和子

針供養。浅草寺境内の淡島堂での行事が夙に有名である。この句の祖母の針は長く作者の手元に置かれていたもの。祖母への感謝の気持ちが感じられる一句だ。

冬の薔薇力のかぎり枯れにけり 島 昌子

枯れるにも力が要るということを教えてくれた一句。

に宣戦布告の最後通牒が米国に届いたため、米国はその「だまし討ち」を合言葉に、日本への宣戦布告を決意した。そういう歴史の流れを鑑みると、この「叩きに叩く」は戦争そのものを叩いているとも思えてくる。

これよりは雪の花見る暮らしかな 菅原 淑子

降雪による災害が多発する冬は憂鬱な季節。この句にもその憂鬱さを見てとれるが、「これよりは」の措辞が柔らかいので一句全体が雅やかに感じられる。「これよりは」は季節ではなく、老い先という人生の分岐点を示した言葉。作者の生きる姿勢が垣間見られる。

ピンク・花柄ほんらいは春呼ぶマスク 杉淵真喜子

柄のマスクや可愛い色のマスクはコロナウイルスの感染が始まってから出回ったもの。コロナ以前のマスクは流感などの季節の限定品であり、マスクの時期が過ぎれば春が到来した。なのに今はマスクを一年中着けることになってしまったと作者は悔しむ。コロナ憎しの一句。

白といふ迷ひなき色朝の雪 鈴木 智子

光の反射率が高い白色は確かに「迷ひなき色」だろう。夜が明けて目にする庭や屋根の雪の輝きには、否が応でも白を認識させられる。この句は下五に坦々と「朝

何の花でもいいというのではない。冬薔薇は冬とはいえず力がありそうである。「力のかぎり」がこの句の命。

幽天を刺したる孤独避雷針 清水 悠太

幽天は「冬の空」の傍題で、寒々とした空。この句の場合は低く暗雲が垂れ籠めている寒空と解釈したい。その幽天を何とビルの避雷針が刺していると。しかも作者はその避雷針が「孤独」だと擬人化して詠む。孤独な避雷針の淋しさを詠む。加えて今にも寒雷が落ちてきそうな感じがするから凄い。新宿伊勢丹の屋上を想う。

北風^{また}を打ち北風に打たれて初テニス 首藤 久枝

「初」を付ければ何でも正月の句になると思つたら大誤り。「初テニス」という季語は本来無い。尤も虚子の時代の歳時記に較べ最近の歳時記には「初テレビ」「初飛行」が載っているので少しは自由になった。しかしスポーツ関係の季語はまだ不自由で、テニスを「初稽古」とは言わないし、「打初」は鼓。「初鞠」は蹴鞠。故に「初テニス」を敢えて採用した。この句、名句になりますよう。

干し蒲団叩きに叩く開戦日 新海あぐり

真珠湾への奇襲が「叩きに叩く」。そう思わせるように作られた巧みな一句。結果的に真珠湾攻撃の一時間後

の雪」が置かれているが、気持ちの良い言葉である。静かさとしんが感じられる。

冬うらら元校長の腹話術 鈴木 藤子

腹話術の句。それだけで読者の目は輝く。元校長先生というから、ボランティア活動の一環として福祉関係の施設を回っているのかもしれない。折しも冬麗の一日。人形を操つての腹話術には笑いが絶えなかつたろう。

さながらに繭のうちなる雪の日々 高橋満利子

この句も雪を謳う。雪籠りの日々を繭の内さながらと感じ取ったのは手柄だと思ふ。繭が雪そのものの色をしているので、その中とはとても美しいことだろう。作者はお蚕ならぬ雪の精として繭で暮らし、やがて羽根を得て希望の世界へ飛ぶ。綺麗な句に仕上がった。

風に現れ風に綿虫消えもして 高橋美智子

疾風のように現れて疾風のように去って行く。綿虫はまさにこの通り、手で追おうとしてもいつのまにか空に消えて見えなくなる。「風」の反復が効いている。

食器棚開けるや寒気なだれ出づ 竹森 美喜

俳句の素材は身近にたくさん在る。この句も食器棚と

いういつも馴染みのあるものにスポットを当てている。食器棚に籠っていた寒気が、その硝子戸を開けた途端にだだれて来た。食器棚の内外の温度差の加減でそのようになったと思われるが「寒気なだれ出づ」がリアル。

マスク二重こころ自由の寒日和 田中 京

一枚のマスクの上にもう一枚マスクを重ねると、もう息苦しくて嫌になる。けれども冬の暖かな一日、自分の心だけはその日差しを得て、解き放された気分。「こころ自由の寒日和」。こうありたいものである。

冬銀河ジャズも流れてゐるだらう 寺田 幸子

〈天の川わたるお多福豆一列 加藤楸邨〉のような句を見ると、俳句って自由でいいなと思う。心動かされるものに触れて、それが俳句を作るということに繋がっていく喜び。掲出の句もまことに自由。『2001年宇宙の旅』では「美しく青きドナウ」が流れていたが、ここでは「ジャズも流れてゐるだらう」。賑やかな宇宙も素敵。

しぐれ虹大川端に句会果つ 長井 敦子

都鳥を詠もうと浅草に集結した時の句。句会終了間際に句会場前の「上野精養軒」内の大きな硝子窓から見事な冬虹を見ることが出来、みんな感嘆した。「しぐれ虹」

魚射る眼人をも射たる百合鷗 中村 幹子

魚を威圧するような百合鷗の眼を見つめていたら、その眼は作者の眼を射貫くような鋭さを持っていた。百合鷗に優しさを求めて隅田川まで来たのだろうか、鳥の厳しい眼差しにたじろぐばかり。命というものは生半可なものではない。今を生きる大変さは鳥もヒトも同じだ。

こたつ居や歳時記脇にまどろみぬ 野沢 慶子

炬燵に入っとうつらうつら。唯まどろんでいたのではない、俳句歳時記を手にとりながらも何やら心地よくなつてまどろんだのだ。こういう経験は結構皆さんしているのではないか、寝床で句帳と鉛筆を持ったまま眠ってしまったということも。向上心ある努力家の一句。

朱筆花丸校庭に舞ふ吉書かな 橋本 恭子

学校でのお習字。書初めで書いた半紙(吉書)に朱筆の大きな〇。それが小正月のどんど焼のときに一緒にくべられ炎と共に中空へ舞う。これを「吉書揚」という。校庭でやられたのだろうか、「朱筆花丸」とは芽出度い。

ひとり言「見える化」せむと日記買ふ 長谷川菊男

「見える化」は企業活動・組織活動の中で使われる用語で、管理・改善方法の一つ。諸活動の実態を視覚化し

とはまことに素晴らしいネーミングで感服した。

雪凍つるペンギンのこと敵父行く 中嶋きよし

父上をペンギンに譬えた句は初めて。さぞかし律義で働き者の敵父だったであろう。雪が凍って、その中をペンギンよろしくパタパタ歩く。笑いを通り越してもはや涙さえこぼれてくる。父恋いの一句。

臘梅や空の奥にはラピスラズリ 中代 曜子

臘梅の香り。振り向くと陽に黄色く透けた美しい花が幾つも咲いている。臘梅の背景には青い空が見え、その奥には宝石ラピスラズリの群青の色が広がる。この句、ラピスラズリと臘梅の色の対比、遠近の対比が綺麗だ。

鶯餅色恋ふころの店先に 中村 敬子

春の到来を「色恋ふころ」と捉えた視点が斬新。その春という季節を鶯餅に託して謳う。〈街の雨鶯餅がもう出たか 富安風生〉。

ポニーに児二〇二二春火曜 中村 東子

ポニーに子どもが産まれた。二〇二二年春のとある火曜日だった。その報告句だが、作者にはとても大事な日だったに違いない。その喜びを五七五で残した。

具体的に見えるようにすることや明らかにした現状の問題点の解決、改善に向けての方法の確立のことをいう。掲出句は、そのビジネス用語を「日記買ふ」という身近なものと取り合わせていて面白い。これまで日記をつける習慣が無く、直ぐに消えてしまう「ひとり言」だけをはたすら発していた作者。その「ひとり言」を日記にて見える化しようというのだ。勿論、独白日記であって、問題点を見つけようというものではない。

冬麗や透けて明るき雑木山 浜田 優子

雑木山全体に差し込む柔らかな冬日。枯木一本一本にまで日が透けて明るい。文字通り透明感のある句で、冬麗の季語も生きています。心が洗われるようだ。

大川に哀しみ数多鳩潜る 原田ミチ子

大川は隅田川。関東大震災はもとより、昭和二十年三月十日の東京大空襲では川などに飛び込んで、火焰は水面を走って人々を焼き焦がすだけ。一晩に非戦闘員九万二千余の命が奪われた。「大川に哀しみ数多」はそういうことも言っているのだろう。「鳩潜る」からの感慨。

煤逃げや駅ふたつしか逃げられず 平野 豊雄

正月の準備として十二月十三日あたりに神棚をはじめ

家中の煤払いをする。その煤払いを家族に任せ、自分は忌避して別室に籠もったり、家の外へ出掛けることを煤逃げという。逃げると言っても、大抵は自分の居場所が見付からず、近所をうろろするのがオチ。掲出句でも精々二駅分の距離の範囲内。そんな遠くにはいけないものである。ところで、作者は何処へ行ったのだろう。

湯冷めして足は荒野にあることし 福井 芳野

風呂上がりの湯冷め。ゾクゾクつとする。この句では湯冷めが足の方に来て、それが「荒野にあることし」だという。荒れ果てた野原。そこに立ち尽くしているように作者は感じたのだろう。私も荒野に足を踏み入れた思いがしてきた。

冬麗や硝子を走る鳥の影 舟生 信子

硝子戸を通して鳥が飛ぶのを見た。それを「硝子を走る」と詠んだ。麗らかな日差しに包まれた冬の一日だが、この句「走る」に何か緊迫感があり、其処に惹かれた。

冴ゆる夜や空気清浄機の灯る 本多 遊子

凍えるような夜の室内。空気清浄機を点けているのだろう、そのスイッチ辺りに何色かの明りが灯っている。空を飛ぶ夜間飛行機の尾灯や翼の灯のように見えたのか

ふるさと燦々⑦ 小田原

金子かほる

神奈川県小田原市は、太平洋に面しお城があり、箱根の麓に位置し、お正月の箱根駅伝の中継所として知られています。私はこの地に小学四年から約十七年住んでおりました。

小田原城は戦国時代北条早雲によって築城され、後北条氏が五代続き、江戸期に城主が何代か代り、明治に入って解体され、関東大震災でほぼ壊滅しました。その後昭和35年に天守閣が復元され現在に至っております。(鎌倉北条とは何の縁もないことを付記しておきます)

昭和30年代の小田原には、東海道(現国道)箱根の登山口として栄えた旅館・履物屋・箱根細工の店などが点在しており、東の海寄りの町は、通称漁師町と呼ばれ、家の前には天日干しの魚が並び、国道寄りの道には蒲鉾屋が軒を連ねておりました。

私の家は武家屋敷のあった地区で、細い路地が十文字に仕切られ、城下町の風情が残っていました。箱根から流れてくる早川が家から近く、兄達についてよく釣りに出かけ、お正月は駅伝を応援に国道まで出かけました。その頃は雪の日が多かったのを覚えています。

夏には、家から水着のまま浜に出て、荒海に採まれる

もしれない。その小さな灯から透徹した寒さを感じ取つたとも読めるこの句。独特の感覚がある。

寒明けの麻痺の手ピクリ生きのびる 松本 余一

寒中の閉塞した暮しが一応終り、寒が明けて立春を迎えた。なかなか遠出の叶わぬ不自由な作者も寒明けをどれだけ待ち続けていたか。麻痺している手指が喜びを示すかのようにピクリと動き、寒明けを実感。それだけでなく生きのびたと安堵した。一句に真実があり、下五の「生きのびる」には実感が籠もる。「聞」に新しく入られた同氏は先日、句集『ふたつの部屋』を上梓された。

欄外へ言葉はみ出す古日記 持田きよえ

古日記は大昔の日記ではなく、去年一年の日記を指す。その日記をあらためて振り返ると、書くスペースが足らず、言葉が欄外に溢れ出ていることに驚く。自分の平素の思いの深さ。今年も早や四月を迎える。

蝶凍ててたましひの色透きとほる 森尻 禮子

魂の一句。微動だにもしない凍蝶の翅を冬のささやかな日が透かす。その透き通つた色に蝶の「たましひ」を感じた。生を感じた。作者のその美意識の深さと言葉の力強さを感じ入った。

のを楽しんでいました。今でも忘れられないのが夕風的大海です。月が昇ってくるのを泳ぎながら眺めたことです。

当時、隣家の門の横に大きなミモザの木があり、咲き出すとその下に濃紫の匂い董が一面に咲き、その周りに雪柳、エリカと続き、一幅の画のようでした。その頃は決まってお邪魔して暫くその景色の中に浸っていました。

ミモザ咲く海鳴りの町遙かなり かほる

高校は県立城内高校に入り、そこで鍵和田柚子師と出会ったことになったのですが、俳句に接し「未来図」に入会したのはずっと先で、五十歳を過ぎてからです。高校生の私は俳句には全く興味がなく、松竹歌劇団(SKD)に憧れ、何度か浅草の国際劇場に通つたものでした。今になって「聞」の句会で浅草に通うことになり、浅草には縁を感じております。

近年の小田原市は国の指定史跡として、城址公園の整備が進められています。平成七年には小田原文学館が開館され、明治以降、この地で暮らし創作にいそしんだ文学者の業績が展示されています。北原白秋が「赤い鳥小鳥」などの童謡を多数発表したのもこの地からです。小田原出生の俳人藤田湘子の句碑もあり、ゆつくり散策したい所です。

私は思春期の多感な時代を小田原で過ごすことが出来、幸せだったと思っています。